音楽ホール整備に伴う市内ホール施設の体系の整理【概要版】

1　整理の背景・目的

・音楽ホールや新県民会館といった新たなホール施設の整備検討が進められている一方で、既存のホール施設の中には老朽化が進み、将来的なあり方を検討すべき時期にきている施設もある。

・こうした状況の変化に効果的・効率的に対応し、バランスの取れた市内ホール施設の環境を実現していくため、既存の市内ホール施設が持つ機能や役割等を改めて整理するとともに、建物の更新に課題のある施設がこれまで担ってきた役割の代替可能性について検討するなど、将来的な市内ホール施設のあり方について、その方向性を整理する。

2　今後見込まれる市内ホール施設の環境変化

①音楽ホールの整備

・本市の文化芸術振興の拠点として、また東日本大震災からの復興のシンボルとして、2,000 席規模の高機能多機能ホールを中心とする音楽ホールの整備検討を進めている。

大ホール：2,000 席規模の生の音源に対する音響を重視した高機能多機能ホール 【概要】コンサートホールと劇場の 2 つの特性を併せ持つ、文化芸術活動の中核拠点 小ホール：300～500 席程度の多様な表現活動に対応できる多機能ホール 【概要】市民の活発な実演芸術活動の支援と、創造的な実演芸術活動の促進を想定

②新県民会館の整備

・築 50 年以上が経過し、施設全体の老朽化が著しく、施設設備の更新に多額の費用が見込まれることに加え、駐車場確保や搬出入の困難さなどから、建て替えの方針が示された。

大ホール：電子音響重視のテクノロジー進化に対応した 2,000～2,300 席の多目的ホール 【概要】国内外の著名アーティストによるポピュラー音楽や大型ミュージカルなどの利用を想定 スタジオシアター：平土間形式で、可動客席を導入した 500～800 人程度収容のホール 【概要】演劇公演に適した形状を基本としながら、あらゆる表現芸術に対応できることを想定

③老朽化施設の今後を見据えた整理の必要

・市民会館（築 47 年）及び戦災復興記念館（築 39 年）については施設の老朽化が著しく、音響設備や舞台機構などについても利用者が求める性能との乖離が生じている。

・両施設とも旧耐震基準による建物であり、残りの耐用年数が短いこと、長寿命化のための改修を行う場合、多額の費用を要すると想定されることなど、費用対効果の観点から、建物としての存続の可否については慎重な判断が必要である。

・また、市民会館については「広瀬川の清流を守る条例」における第一種環境保全区域に位置し、高さに関する制約がある。

３　音楽ホールに係る需要想定調査（概要）

・前項における環境変化を踏まえながら、将来的なホール施設のあり方を検討するため、音楽ホールにどのような需要が想定されるのか、調査を行った。

≪調査の考え方≫

・音楽ホールの将来の需要は、現在既に市内のホール施設で行われている催事が移行してくるものが基本となると想定し、2019 年に行われた催事をもとに、音楽ホールが有する優れた音響や舞台設備などによって効果的な公演になるものなど、7 つの基準により振り分けを行った。

【音楽ホール大ホールの利用想定日数】

利用想定	対象日数
移入元施設	
仙台サンプラザホール	８
宮城県民会館	５５
市民会館大ホール	１５
イズミティ２１大ホール	５５
青年文化ｾﾝﾀｰｺﾝｻｰﾄﾎｰﾙ（仙台フィル以外）	３８
青年文化ｾﾝﾀｰｺﾝｻｰﾄﾎｰﾙ（仙台フィル）	４１
名取市文化会館	９
多賀城市民会館	１５
岩沼市民会館	３
小計	２３９
自主事業など	３４
合計	２７３

≪調査結果の要点≫

・市内各ホール施設の催事の中から、音楽ホールへの移行基準に沿う催事を選定し、これに自主事業などを加えると、２７０件程度あり、十分な需要が見込まれる。

・市民会館について、将来的に施設の更新を行わないと仮定した場合、同施設の大ホールが現在担っているホール需要については、音楽ホールを始めとした市内のホール施設によって受け入れることが可能である。

４　今後のあり方

（１）音楽ホール

・音楽ホール検討懇話会報告書において、音楽や舞台芸術などの実演芸術を振興し、新たな文化芸術の創造拠点となることを提言されており、これを踏まえ、創造発信拠点に位置づけることができる。

・メインホールの性能に着目すると、現状では本市施設で整備されていない「広域利用に対応可能な生音重視のホール」が、音楽ホールの整備により充足する。

（２）市民会館

・需要想定調査によれば、市民会館大ホールのホール需要は、音楽ホール大ホールをはじめとした市内ホール施設によって受け入れることが可能であり、市民会館小ホールについても、音楽ホールに規模・機能の面で類似性がある小ホールが整備される予定である。

・旧耐震基準に基づく施設であり、長寿命化等に要する費用や現在地における建築上の制約を考慮すると、現在地での存続や建替には課題が多い。

・地域文化推進拠点として市民会館が担ってきた役割は、その相当程度が音楽ホールにおいて代替が可能と考えられることから、音楽ホールの開館までは現在の機能を維持し、それ以降の施設の更新は行わない方向で検討を進めることが望ましい。

・なお、会議室等の機能については、市民利用、営利利用等の現状の動向なども踏まえつつ、別途、今後のあり方を検討する必要がある。

（３）戦災復興記念館

・記念ホールについては、音楽ホール小ホールが規模・機能や役割の面で類似性があり、利用者の受け皿となることは可能と考えられる。

・旧耐震基準による建物であり、長寿命化改修等の費用対効果の観点から、建物としての存続については、市民会館と同様、課題がある。

・以上のことから、仙台空襲や戦災復興事業に係る記録の保存・展示機能については別途検討がなされることを前提に、音楽ホールの開館までは現在の機能を維持し、それ以降の施設の更新は行わない方向での検討を進めることが望ましい。

・会議室等については市民会館と同様に、別途、今後のあり方を検討する必要がある。

（４）仙台サンプラザ

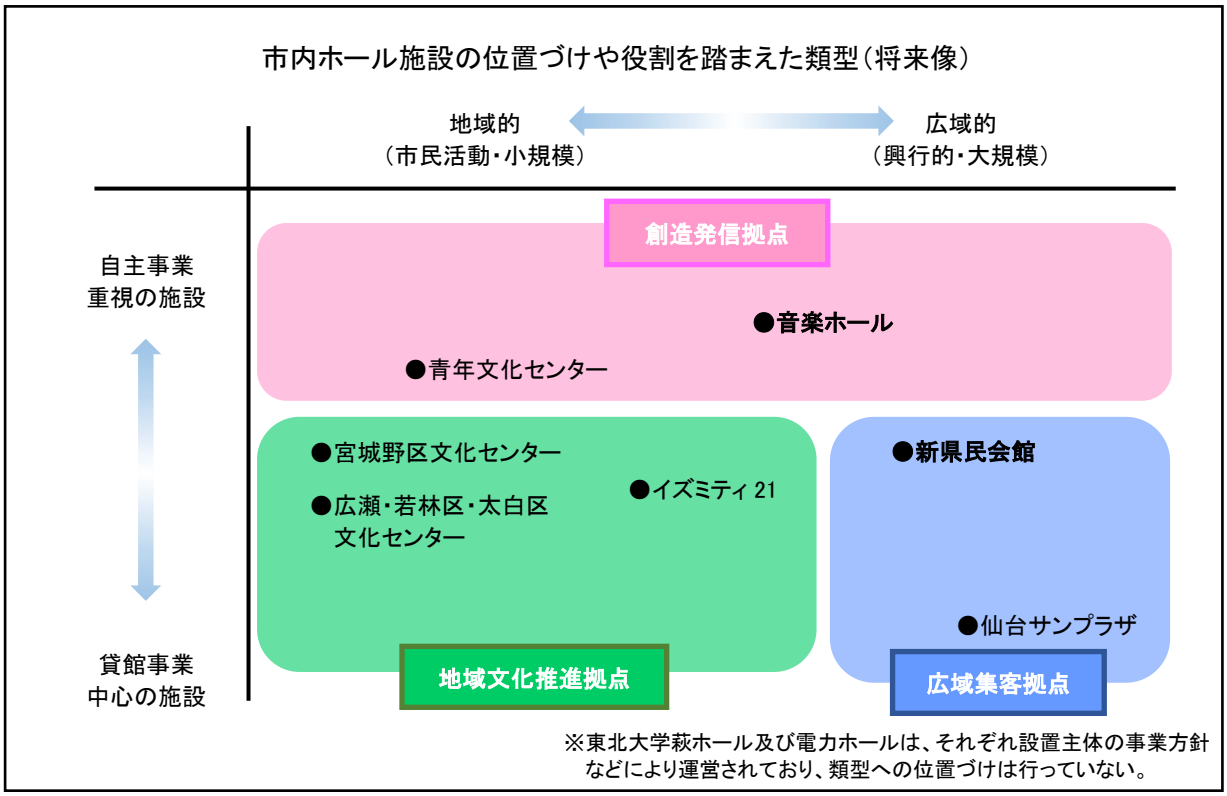
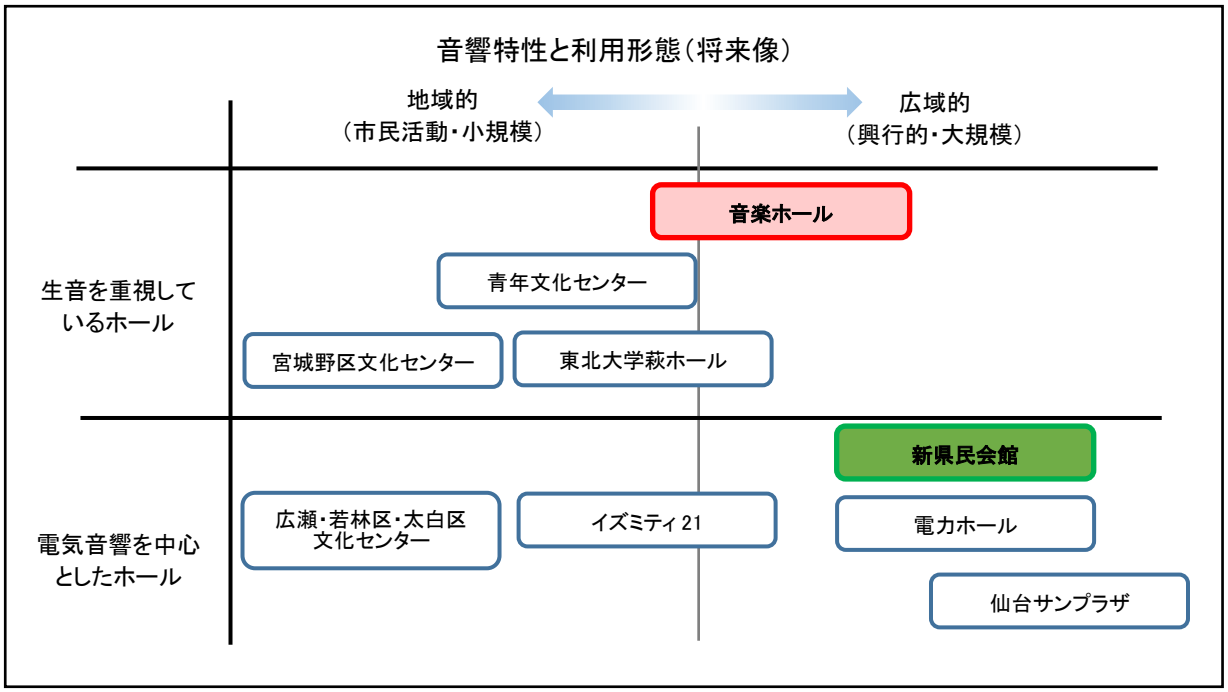
・仙台サンプラザは、現在、県内のみならず東北のポップス公演の主要拠点となっている。

・一方で、電気・機械設備がホテル棟とホール棟の２棟で共用されていることから設備の分割ができず、一体としての施設管理が前提となっていることに加え、開館から３０年が経過し、設備の老朽化対策が必要な時期に来ている。

・公設民営の施設であり、弾力的で柔軟な運営によって今後も一定の需要が見込まれると想定されるが、当面は、施設の現状を維持しながら運営を継続し、新県民会館の整備をめぐる動きを始めとした今後の情勢の変化や需要量の変動等、様々な要素を見極めつつ、将来的な改修・維持費負担の問題などと合わせて、施設のあり方について引き続き検討が必要である。

５　ホール体系の将来像

【 施設の性質に着目した分類による将来像】



【 メインホールの性能に着目した分類による将来像】